ART PAPER Nagoya City Art Museum News

アートペーパー

ART PAPER 名古屋市美術館ニュース 2020年夏号 114 Nagoya City Art Museum

feature article 特集

若き日のマリー・ローランサン

淡いパステルカラーで夢のような世界を描き、今なお多くの人々に愛されている女性画家マリー・ローランサン。彼女の瑞々しい青春時代に思いを馳せてみます。

1. 生い立ち

マリー・ローランサンは1883年、母ポーリーヌ・ローランサンと父アルフレッド＝スタニスラス・トゥーレの間に生まれました。しかし、他に家庭を持っていた父親の名前は出生届に記載されませんでした。父親は、ポーリーヌとその子供マリーを経済的に援助しており、マリーがパリで評判の高い公立校・ラマルチーヌ中学で学んだのも、この援助あってのことと考えられます。母親は、ほっそりとした美しい女性であり、厳格ではあるものの優しい人でした。彼女は、マリーに対して最初は冷淡な態度をとっていたといいます。しかし、ある時から二人の間にひとつの絆が生まれ、稀ともいえる優しさでマリーに報いたそうです。母親は、娘にネルヴァルの詩やシャンソンなどを伝え、二人は骨董品や思い出の品に満たされたアパルトマンで、静かな生活を送りました。そこには、訪ねてくる親戚もなく、彼らが話題にのぼることもなく、女性二人きりの閉じられた空間が出来上がっていたといえるのでしょう。ローランサンの、いわゆる女性的なものへの嗜好は、基本的にはこの時期に育まれたといえるのかもしれません。

2. 洗濯船の時代

マリー・ローランサンは1904年、アンベール画塾に入って絵を学びますが、そこでジョルジュ・ブラックと知り合います。翌年には、このブラックに触発されて画塾をやめ、1906年、23歳の時に彼に連れられてモンマルトルにあった画家たちの共同アトリエ「洗濯船」を訪れます。そしてここで、多くの若い芸術家たちと知り合いとなります。1907年には、この「洗濯船」に住んでいたピカソから詩人のギヨーム・アポリネールを紹介されます。この経緯について、のちにアポリネールは彼の『虐殺された詩人』という小説の中に記しています。そこには、ピカソが「ベニンの鳥」という綽名で登場し、二人の間をとりもつ場面が描かれています。(注1) ローランサンとアポリネールはたちまち恋に落ちます。アポリネールはローランサンの画家としての才能を最大限に引き出し、洗濯船の他の仲間とともに、彼女に芸術的刺激を与えました。ローランサンはこの洗濯船の時代にアポリネールや他の仲間たちと自分とが一緒にいる場面を描いています。また、この頃、ピカソはアンリ・ルソーの絵に感銘を受け、1908年に洗濯船のピカソのアトリエで「ルソーの夜会」を開催しました。この夜会の席でのローランサンについて、ピカソの当時の恋人であったフェルナンド・オリヴィエが記しています。

（図1）マリー・ローランサン《横たわる裸婦》1908年　名古屋市美術館蔵

（図2）マリー・ローランサン《サーカスにて》1913年頃　名古屋市美術館蔵

―画描きたちのこんな世界に仲間入りしつつあって、友人たちには「ココ」と呼ばれていたあわれなマリー・ローランサンはその時〔食前酒の際〕、彼女を酔わせてやろうと決めていた連中の、念入りな気配りの的となった。

彼女は造作なく酔っ払った。アトリエに戻って来た彼女がまず示した心づかいは、長椅子の上に並べてあったタルトの上に倒れこむことであって、両手もドレスもジャムまみれのまま、彼女は皆に触れてまわるのだった。大はしゃぎはなかなかおさまらず、アポリネールと彼女はとうとう口論する羽目になり、ココはいささか突っけんどんに母親のところへ送り返された。(注2)

このフェルナンド・オリヴィエの証言以外に、小説家、詩人、アートコレクターであったガートルード・スタインによる報告もあります。彼女の報告は、オリヴィエの証言とはいささか異なっています。ガートルード・スタインによれば、ローランサンは彼女とその兄に両脇を支えられながら、酔っ払ってカフェから洗濯船まで帰ってきたとのこと。そしてこの若き女性画家の体たらくを見て、フェルナンド・オリヴィエは入ってくるのを

美術館そして私―80年代からミレニアムへ

(続)版画そして色斑(ドット)のこと

美術家　山本富章

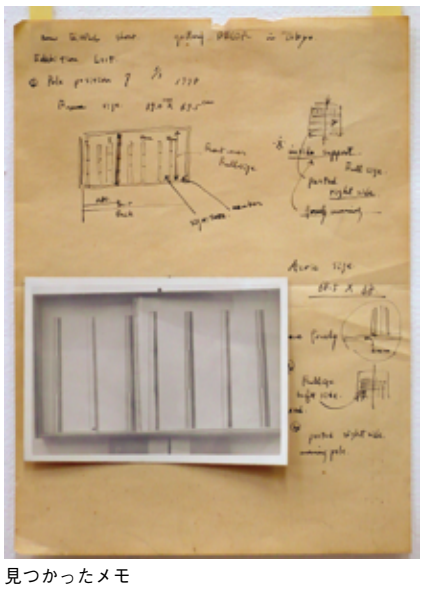
版画研究室に入りびたってなにかを探そうとしていた同級生の田村光義・平井健三君と修了する頃三人の頭文字、山田平をアルファベットで並べた《YAMATABIRA》というグループ展を東京で始めた。平井君は東京版画研究所、田村君はドイツへと長久手を離れた。田村君もドイツから作品を送ってくれ、1975年から83年まで６回、東京や名古屋で発表し続けた。私はメゾチントの黒の諧調に惹かれ版画を続けたいと思い、プレスを手に入れ刷り師を始めていた。メゾチントの目立てを続けてきたことから私の右腕の腱鞘炎は悪化し、落とした物を拾おうと手を伸ばすと肩まで激痛が走り作業台に向かっていた椅子から崩れ落ちたこともあった。父の鍼のおかげで、何とか作業に支障のない程度を維持できていたものの、次第に絵筆を握ることもつらくなり私の腕は限界に来ていた。様々な素材と向き合いながら、自らの表現を生み出すために版画の先につながるものを見つけなければならない苦しみ痛みでもあったのかもしれない。

30歳目前、助手として大学に戻って版画を担当することになったのだが、リトグラフからはしばらく離れていたこともありローラーでインク盛りが均一にできるように何度も繰り返し授業に対応できるよう努力した。

東京国際版画ビエンナーレに展示されていた立体的なペーパーキャストの作品に惹かれたことから立体的な版画が出来ないかと考えたりして、私なりに既製の方眼紙にリトグラフでイメージを刷り凹凸を作った厚紙の上をラッピングするように貼り込み版画としてグループ展で発表していた。

「あの作品おもしろいから、ダイナフィットのスキー靴と交換でどうだ」と櫃田先生が言った。それは40㎝×70㎝で奥行が６㎝ほどの箱を自作し、リトグラフで刷った２枚のシートの間に紙芯を入れたものだ。写真が不鮮明で申し訳ないが箱の中の左の柱３本のシートよりも右の４本の方が少し手前にせり出して明るく見えないだろうか。先生の長久手の芸大職員住宅の壁にずっとかかっていたが、何年かして日進の新しいお宅にお邪魔し久しぶりに見た自作は、使用した紙や額装に対する知識も乏しかったから経年変化でシミが出たりして恥ずかしく消え入りたい思いであった。この作品のシートパーツを2016年の展覧会の準備の際にマップケースの底に見つけ、これで再制作できないかと考えている。

版画＝平面という概念から逃れたいという思いは少しずつ大きさを増し、私の絵画表現を探す日々となった流れをこれまでの連載の中で感じていただけたらと願っている。



見つかったメモ

時の話題

今年２月中旬と３月下旬の二度、昨年10月の令和元年東日本台風により甚大な被害を受けた川崎市市民ミュージアムの被災収蔵品レスキューに参加しました。同館は多摩川沿いの等々力緑地内にある総合博物館で、近代日本画、写真や映像、漫画、グラフィックなど美術に関連の強い分野から考古、民俗まで多岐にわたる約26万点の資料を所蔵しています。

川崎市からの協力要請を受け、事前調査等を経て美術部門の救援・応急処置作業が始まったのは昨年11月半ば。複数の関係団体が協同で支援する中で、全国美術館会議事務局から首都圏や関東近郊の美術館、博物館にむけて派遣職員の募集があり、年が明けて東北、北陸、東海エリアにも声がかかりました。

今回、最も懸念されたのはカビによる被害です。生活排水の混じった雨水が床上２m以上流入し、電気系統のまひによって換気もできず、密閉状態となった収蔵庫内には多種多様なカビが発生。従事するスタッフには防護服や防塵マスク（DS２レベル）の着用、休憩ごとのアルコール消毒が義務付けられました。くしくも新型コロナウイルスの感染状況が日々緊迫感を増し、各種資材の入手が困難になりつつあった頃です。医療従事者が必要とするものを使うことへの躊躇と課せられた役割との間で逡巡しながら「いま従事している作業は不要不急に当たらない」と互いに言い聞かせ、各スタッフが資材を無駄なく丁寧に使うことに留意して活動にあたりました。レスキュー初期段階では資料劣化を最小限に食い止める策として、低温乾燥によってカビの生育が鈍化している冬のうちに保管に適した環境へ避難させ、応急処置を施すことが重視されたのです。

多くの関係者の協力の結果、収蔵庫からの搬出作業は終了に近づき、６月中旬時点で活動の中心は応急処置とくん蒸、カビ払い作業へ移っています。とはいえ大半の本格的な修復作業はこれからです。引き続きできる支援を続けていく一方、今回のような事態はどこでも起こりうると認識を改めての防災対策の見直し、館内スタッフの意識共有をどう進め、高めていくかなど取り組むべき課題の多さを改めて強く感じています。（３）

※川崎市ホームページ（www.city.kawasaki.jp/250/page/0000116670.html）や市民ミュージアム公式サイト（www.kawasaki-museum.jp）でも情報公開が行われており、どなたでも閲覧が可能です。よろしければ併せてご覧ください。

押しとどめようとしたそうです。その少しあと、アポリネールがうまくローランサンを外へ連れ出し、ほどよい間をおいてまた二人は姿を見せました。そしてローランサンは静かになり、夜会の終わりには、ノルマンディーの可愛らしい歌謡を何曲か歌ったといいます。(注3)

ルソーはローランサンとアポリネールの肖像を描いています。《詩人に霊感を与えるミューズ》と題されたその作品でローランサンは豊かな女神のような姿で描かれます。アポリネールは、「芸術家として、ローランサン嬢の場所を、ピカソと税関吏ルソーの間に置くことができる。」としています。ローランサンの作品は、ある面ではピカソのキュビスムの影響を受けながら、ルソーの素朴な作風にも学んでいます。それは、この洗濯船の時代に培われたものなのです。当館所蔵の《横たわる裸婦》（図１・前頁）は、ちょうどこの時代に描かれた作品であり、そこにはわずかではありますが、キュビスムの影響が見られます。平面的に対象をとらえる描き方や仮面のような女性の顔の表現はピカソを思わせます。そして同時にそこにはルソーの描く作品のような素朴な画風も見てとることができるのです。

3. ローランサンとアポリネール

前述したとおり、ローランサンとアポリネールは1907年、ピカソの導きによって出会いました。ローランサン23歳の時です。アポリネールと出会うまでのローランサンの人生は平凡なもので、絵の勉強に特に熱心というわけでもありませんでした。しかし、アポリネールと出会い、洗濯船の仲間たちと出会ったことで、彼女の人生は急展開することになります。

ローランサンの画風は、アポリネールを介して知ったキュビスムやルソーの絵画から多くを吸収して作られていったものといえます。彼女はキュビスムの理論的擁護者でもあったアポリネールの恋人として、当時、「キュビスムの女神」と呼ばれ、皆から愛されました。ローランサンはいたずらっぽく、妖精のような雰囲気を持っており、皆が互いに自分の妹だと主張しあうようなところもあったようです。アポリネールに大きな影響を受けたローランサンでしたが、1911年頃になると、二人の愛情には翳りが生じます。お互いの母親が相手を気に入らなかったというのも理由のひとつと言われていますが、直接的にきっかけとなったのは、アポリネールが「モナ・リザ盗難事件」の共犯容疑で逮捕されたことです。容疑は晴れて、アポリネールは釈放されますが、この事件をきっかけに、ローランサンの心は冷めてゆきます。ローランサンがこの時アポリネールを疑ったというわけではないのですが、彼女の極端に繊細な神経が、このようなどぎつい事件に耐え得なかった、それで生理的に拒絶反応を示したともいわれています。アポリネールの小説『虐殺された詩人』の中には、もう彼を愛さなくなったローランサンの心理を想像して書いている部分があります。(注4) また、傷ついたアポリネールはその心境を今日でもよく知られている「ミラボー橋」という詩の中に表現します。二人の間は、その後友達の計らいによって修復を試みられたこともあったようですが、それも不首尾に終わり、結局はうまくいきませんでした。その後、ローランサンはドイツ人のヴェッチェン男爵と結婚し、戦時中は敵国人となったため、亡命生活を余儀なくされることになります。しかしながら、ローランサンにとって、アポリネールは生涯にわたって特別な人であり続けたようです。1956年に彼女が亡くなった際には、アポリネールからの手紙の束を胸に葬られたということです。

4.《サーカスにて》

さて、ここで、当館所蔵のローランサンの作品《サーカスにて》（図２・前頁）を見てみましょう。画面には二人の女性が描かれています。左側は、踊り子でしょうか？短いスカートをはいています。右は、ギターを持っていますので、ギター弾きの女性でしょう。左の女性は立って片足を上げ、右の女性は座っています。二人は片手をあわせています。背景は、どこかの部屋の中のように見えますが、幾何学的な処理が施されています。色彩は、淡いピンク、ブルー、グレーといった、ローランサン独特のもので、この頃既に、ローランサン特有の色彩表現が確立されていることがわかります。面白いのは右の女性の描き方です。対象をいろいろな方向から見て描くキュビスムの手法を、彼女の腰から足にかけての描き方に見出すことができます。しかしその一方で、この女性の流麗な線にアール・ヌーヴォーのような雰囲気も見ることができるのです。この女性の中には、キュビスムの立体的造形とアール・ヌーヴォーのような流麗な線とが同居しているように見えます。人物の表情はどうでしょうか。なにか愁いを帯びた表情です。この作品は1913年頃に描かれていますが、ローランサンがアポリネールと別れたのがこの頃ですので、その失恋の痛手もまだ癒えていない頃といえるでしょう。人物たちの表情の中に、そのようなローランサンの愁いの気持ちも表れているといえるのかもしれません。

ローランサンが青春時代に描いたこの作品は、後期のローランサンの作品と比較すると、いわば、熟す前の果実のようなイメージといえるでしょうか。しかし、後の彼女の世界につながる要素はこの中に既に表れています。ピンク、ブルー、グレーを基調とした淡い色彩、女性二人による親密な空間、ロマンティックで夢想的な雰囲気など、全て、その後展開されていくローランサン独自の世界につながる要素です。そして、初期作品ならではのぴりっとした緊張感を画面から感じ取ることができます。洗濯船で過ごした青春時代はローランサンにとってかけがえのないものでした。この作品には、キュビスムの影響も含めて、ローランサンの青春時代のエッセンスが凝縮されて表れているように思います。若きローランサンの世界をこの一枚の作品の中に確かに見ることができるのです。（AN）

注１　ギヨーム・アポリネール著　鈴木豊訳 『虐殺された詩人』（講談社文芸文庫） pp.65-66
注２　ジョゼ・ピエール著　阿部良雄訳 『マリー・ローランサン』（美術公論社） p.99
注３　ジョゼ・ピエール著　前掲書　pp.99-100
注４　ギヨーム・アポリネール著　前掲書　p.116

展覧会の舞台裏

コロナと美術館

前回のこの欄でスイスのローゼンガルト・コレクションのピカソのご紹介をしました。訪問したのは２月の中旬で、その後スペインにも５日ほど滞在しました。と書くと「え！大丈夫でしたか？」と聞かれそうですが、２月のヨーロッパはコロナなど遠いアジアの国の出来事、という感じで平和そのもの。まさかその数週間後にあのような事態になるとは全く想像もできませんでした。その後の状況についてはみなさんよくご存知の通りですが、現時点（６月中旬）ではヨーロッパも日本もやや落ち着きつつありますが、いつ第二波がやってくるかもしれず、かつての日常からは程遠い日々が続いています。当館は４月下旬から開催予定だった「みんなのミュシャ展」を断念し、11月から開始予定だった工事を前倒しにして行い、そのまま休館を続行しています。今のところ、工事終了の期日についてまだ目処が立たず、いつから開館できるというお知らせができない状態です。他の美術館や博物館施設は今月あたりから少しずつ再開していますが、感染予防対策を十分に講じた上に、日時指定などの入場制限を行って、恐る恐るという感じで活動を始めています。この状態がいつまで続くのか誰にも予測はできませんが、「新しい生活様式」が決して一時的なものに終わらず、これからの標準になるのではないかという予感は多くの方がお持ちではないでしょうか。美術館も含めて、「コロナ前」と「コロナ後」では世界のあり方が大きく変わりそうです。

美術館のこれからのあり方を大きく変えそうなコロナですが、特に影響が大きいのが日時指定などの入場制限です。今までにも、人気作家の大規模な展覧会では、一日に５千人を超えるような入場者で、会場がかなりの混雑になることが何度もありました。美術品を鑑賞する環境としていかがなものか、というご意見を頂戴し、制限の是非を検討したことは一度や二度ではないのですが、なかなか踏み切れずにいました。しかし、今回のように健康や生命にも直結するような事態となると、躊躇している場合ではなく、即決即断が求められています。入場制限をかけることによって展示環境を良好に保ち、感染の防止にもなるのであれば良いことづくめのような気もしますが、そうとばかりは言えません。この欄で繰り返しお伝えしているように、近年の展覧会は莫大な経費を必要とするようになっており、多くの入場者を前提にしないと成立しないような仕組みが出来上がってしまっています。その入場者に制限をかけるということは、つまり一人当たりの負担が大きくなることを意味します。まだ試算の段階ですが、人気作家の大規模展の場合、現在の入場料金を倍程度にしないと成立しそうにありません。「いきなり倍！」のインパクトは強烈で、果たして今までのように来館していただけるのか？難しそうな気がするのは私だけではないと思います。コロナと共生しなくてはならない新しい時代。美術館は当分模索が続きそうです。（F）

感想ノートから

没後90年記念　岸田劉生展

2020年１月８日(水)～３月１日(日)

来場者に展覧会の感想や思いを綴っていただく「感想ノート」。岸田劉生への思い、そして麗子やお松の肖像画、風景画、静物画と多彩な作品への思いが熱く綴られていました。また、麗子のイラストや似顔絵も多く見られました。ここでは、「麗子像」に寄せていただいた感想のいくつかをご紹介します。

「麗子ちゃん、すごく怖いと思っていた印象が、実物はすてきで、やさしくて、生きているみたいで…心があたたかい気持ちになりました。来れて良かった♪」／「れいこちゃんが頑張ってモデルしていたと知り、なお愛おしくなりました♡」／「めちゃよかった‼ れい子ちゃんが写真で見たよりよかった！きてよかった‼」

教科書で麗子に出会ったという方も多くいらっしゃいました。

「美術の教科書に載っていたREIKOを初めて見た時、授業中に大爆笑してからはや30年‼ 生REIKO見れたァー‼ すごく、すごく可愛くて、可愛くて×100‼ 金沢から見にきたかいがありました。最高でした‼ REIKOフォーエバー♡」／「子供のころ、教科書に載っている麗子像を見て、「自分の娘なのに、こんな不気味に描くなんて、なんて親なんだ‼」と思っていました。今、大人になり、息子と娘（ともに高校生）を持つようになり、今回あらためて作品の数々を見ると「あ、娘大好きなパパなんだな～自分と同じじゃん。」と腑に落ちました。すばらしい絵でした！」

また、同じ「レイコ」という名前であることや、似ていると言われて気になり始めたことなど、そのエピソードから「麗子像」が多くの方に愛され、そして記憶に残る作品であることが伝わってきました。

「中学校の美術の時間に、初めて「麗子像」に触れました。当時おかっぱ頭の私はクラスで「似てる！」と話題に。母にも納得されました。それから約30年。初めて本物に会いました。娘への愛をたっぷり感じられるほど、私も大人になりました。そんな私のヘアスタイルは30年で色々変わり、今はボブスタイル＝長めのおかっぱ頭に落ちつきました。また何年後か、どこかで会いたいな。」／「娘は礼子です。いつも字は違うけど、この画を愛おしく思う母です。」／「私の名前は「れいこ」です。姉からもらったチケットでなにげなくここに来ました。ここに来て「れいこ」「れいこ」となんかご縁かなと思いました。先日６？才の誕生日もむかえ、今日ここに来れて私自身の人生を麗子さんと伴に振りかえることができました。これからの老後の人生を考えていくきかっけになったと思います。」

そして、最後はしっかりとした字で書かれていた感想です。これからも多くの作品に触れて、いろいろと考えてみていただけたらうれしく思います。

「きょうわたしはえをさんこうにじゆうちょうにえをうつしてかきました。えはとてもべんきょうになりました。」／「きし田りゅうせいさんは自がぞうをたくさんかいていたことをしり、なんでそんなにかいたのかなとおもいました。れい子、かわいかったです。」

数多くの感想を本当にありがとうございました。（I.）

展覧会 現在進行形

「写真の都」物語 －名古屋写真運動史：1911－1972－

~~2020（令和２）年９月12日(土)～11月１日(日)~~
⇒　開催延期

新型コロナウイルスの感染拡大により、オリンピック、パラリンピックをはじめ、さまざまなイベントや催事が相次いで中止、あるいは延期されています。当館に於いても、４月から開催を予定していた「みんなのミュシャ」展と常設展、さらには一連の教育プログラムやボランティア活動を中止し、今日まで休館が続いています。本年９月に予定して居りました展覧会「「写真の都」物語－名古屋写真運動史：1911－1972－」もその開催が延期となりました。

今日ではあまり知られてはいないのですが、名古屋は全国でも屈指の写真の“聖地”でもありました。当地の写真表現は、1911年に創設され、日本のピクトリアリズム（絵画主義的写真）をけん引した〈愛友写真倶楽部〉に始まります。メンバーの一人である日高長太郎（1883－1926）は、倶楽部創設に当たり、「写真の都‼ 名古屋たらしめたい」とその抱負を述べています。果たして、その後の名古屋の写真表現は、彼の願いと予想をはるかに超える多様な展開を見せることになりました。

例えば、1930年代末には「前衛写真」と呼ばれる名古屋発信の表現が全国を席巻し、戦後は復活したシュルレアリスム（超現実主義）表現が、社会生活を凝視するリアリズム運動と「鎬を削り」ました。そして写真家・東松照明（1930－2012）の登場と彼によって組織された〈中部学生写真連盟〉の活動については、本紙前号で紹介したとおりです。連綿と続く当地名古屋の写真表現に於いて、さらに特筆すべきは彼等の活動が個々の作品ばかりでなく、機関誌や会報、写真集を出版し、自分たちの主張や表現志向を広く伝えようとしたことです。各時代に出版された多種多様な資料群は、名古屋が各時代を通じて全国でも屈指の「写真都市」であり続けたことを証明します。本展覧会は、近代名古屋の写真表現を、時代のなかで思潮を反映し、あるいは社会に対抗しながら展開した“運動体”として捉え、その「写真体験」の軌跡を、作品や資料に辿ろうとするものです。未だ開催時期は確定できていませんが、調査のために市内外を巡り、関係者の手許に遺され、確認できた表現と貴重な資料を、どのように展示して見せるか。そのことを考える時期と割り切って準備を続けています。（J.T.）

郷土の作家たち

中村宏（なかむら ひろし／1932－）

静岡県浜松市に生まれる。幼いころから映画に親しみ、鉄道や飛行機など機械に関心をもつ。1951年、日本大学芸術学部美術学科に入学し、学生運動や青年美術家連合に参加。日本アンデパンダン展、自由美術家協会展などに出品。23歳のとき、砂川での米軍基地拡張反対闘争に参加し、現場を取材して描くルポルタージュ絵画に取り組む。その後、新聞や雑誌の記事等を資料として、モンタージュやコラージュの手法を取り入れた制作方法にシフトしていく。1960年代には、特定の社会的事件ではなく身近な私的事象を取り上げて描くようになり、「観念絵画」、「観光芸術」といった概念を提示。1960年代半ばから70年代には、車窓やオペラグラスを覗く風景を取り入れたシリーズが登場。キャンヴァスの中に別の枠組を設定することで、絵画を外側から見る視点と、絵画の中で窓やレンズを眺める２種類の視点を作り出し、鑑賞者の存在を強く意識した構図をとる。中村は時間の流れや動きの変化に一貫して関心をもち、残像や錯覚といった視覚効果や、モンタージュなどの映画的手法を応用した作品も多い。また、機関車やセーラー服、便器といった身近に存在するモチーフが繰り返し登場し、それらが半ば強迫観念のように、連続して描かれる点も特徴といえる。

《車窓篇TYPE10-A, B, C》は、本紙前号の「どこがおもしろい?!」で紹介した作品。車窓にはレオナルド・ダ・ヴィンチ、セザンヌ、デュシャンの作品が左から時系列で描かれ、手前にはセーラー服の小さな女の子の姿がある。三作品の関連や、全体を支配する赤の色調、小人ほどの小さな女の子など、謎めく画面に鑑賞者はさまざま想像を膨らませた。三作品の年代の違いやグラデーションが示唆する時間と空間の変化、遠近法の効果などに言及したコメントが多く見られ、鑑賞者が能動的に絵を見て考えることで、絵画と鑑賞者の間に関係が生まれることを大切にしていた中村の意図がよく汲み取られていた。（haru）

中村宏《車窓篇TYPE10-A, B, C》（３点１組）のうち
TYPE10-A　1981年　当館蔵

鬼頭甕二郎（きとう かめじろう／1897－1952）

鬼頭甕二郎については、本紙53号（2002年春号）で一度取り上げている。この枠は当時、「郷土作家列伝」という名称だった。鬼頭は、第二次世界大戦の戦災で手元に残していた作品を家とともに焼失しているため、前回から年月を経ているが、新出の資料などがあるわけではない。既存の資料から補足できることを紹介する。

鬼頭の死後に遺族によって発行された『甕二郎画文集』（発行者鬼頭平太郎、昭和二十七年十月十日発行）には、鬼頭の作品図版と著述に加えて、大川周明（1886－1957）と橋本節哉（1905－1965）による追悼文が含まれている。橋本は、日本画家の橋本関雪（1883－1945）の長男で、フランスで知り合い、終生の友となった洋画家で、鬼頭の死去前年に名古屋で二人展を開催している。大川は、亜細亜主義、日本精神復興の立場にあった思想家で、極東国際軍事裁判（東京裁判）でＡ級戦犯容疑で起訴された唯一の民間人である。

『甕二郎画文集』には、鬼頭の日記（1949年10月28日）から、鬼頭が大川を訪ねた折りの記述が「かほり」と題して収録されている。大川は、裁判中に精神障害と診断され、審理を外されているが、「かほり」の時期は、大川が1948（昭和23）年に不起訴となり、精神病院から神奈川県中津の自宅に帰った後のこととなる。

鬼頭が大川とどのようにして知り合ったかは不明である。鬼頭は1923年から1928年までフランスにあったが、尾張徳川家第19代当主の徳川義親（1886－1976）が支援者の一人となっていた洋画家の藤井外喜雄（1901－1994）とともにフランスに渡っている。周知のように大川は徳川義親と親しいため、藤井を介しての繋がりが考えられる。

『大川周明日記　明治36年～昭和24年』（大川周明顕彰会編集、岩崎学術出版社、1986年）の以下の記述にある「鬼頭」は、甕二郎のことであると考えられる。（「」は引用部分。/は改行を表す。）

187頁 昭和13年12月８日「名古屋の水谷鬼頭両氏来泊。」
209頁 昭和15年１月21日「夜名古屋の水谷・鬼頭両君来り、歓談して辞し去る。」
231頁 昭和18年１月２日「名古屋鬼頭君より羊羹。」
249頁 昭和18年４月12日「鬼頭・水谷両君来訪、ホテル食堂にて昼食を共にす。(/中略）八時半鬼頭・水谷君に送られて帰宿。/両君は今日の晩餐を菊丹といふ家にて面白き老婆の魚料理にせんと言ひ、予も之に應じたりしが會頭の招待ありて果さず。」（筆者注：大川は11日に来名し、観光ホテルに宿泊、13日に大阪に向かっている。）

「水谷」は、鬼頭のご遺族などのご教示から鬼頭が卒業した菅原尋常小学校の同級生であった人のことであろうと思われる。『大川周明日記』には「主要人名注」があるが、「鬼頭」「水谷」の記述はない。

鬼頭は、大杉栄（1885－1923）を描いた《出獄の日のＯ氏》（1919年、長野県信濃美術館蔵）で知られる林倭衛（1895－1945）とも親しく、小崎軍司著『林倭衛』（三彩社、1971年）にも鬼頭の名前を見ることができる。（み。）

＊鬼頭甕二郎については、「どこがおもしろい?!」もあわせてご覧ください。

どこがおもしろい?!

鬼頭甕二郎《風景》 1925年
油彩・キャンヴァス　60.0×73.0 cm

今回とりあげるのは鬼頭甕二郎（きとうかめじろう、1897－1952）の《風景》です。2020年１月８日㈬から３月１日㈰まで常設展で公開し、多数のコメントをお寄せいただきました。今回はそのなかからご紹介いたします。

- 季節は、初夏でしょう。木の光の当たり具合から、生命の生き生きとした感触が感じられます。そして、歩いている人は、右手に何かを収穫したものを、大切そうに、持っています。ヨーロッパの田舎の感じです。（ムーブさん、27歳）
- 友人と見解が違ったのですが、風景の中にいる人は、男？女？持っているものは何でしょうか。。。友人はパンだと言い張りますが、いくら海外サイズだからと言ってこの大きさはありえないと思います。私は麦か何かの稲穂だと思いました。いかがでしょうか（鬼POP激キャッチー最強ウルトラハイパー女子大生さん、21歳）
- 緑がとてもすがすがしい印象で、見ているととても気分が軽くなります。夏の日の様子なのでしょうか。左端の人物の赤い上着と青のスカート（？）がポイントになっていて、引き込まれるような気がします。（ボビーさん、54歳）
- みどりがしゅやくの中でポツンと橙色のふくをきているひとがいるけど作者はこの人を目立たせたかった？（王さだはるさん、９歳）
- 四角いポコポコしたタッチが、太陽の光を感じさせる。タイル画にも見えておもしろい。（hikokoさん、48歳）
- なんでもなさそうな風景だけど、奥行きも感じられて…左手の小道を曲がって行くと、どんな風景が見られるかな？“どうだ！”と、せまるのではなく、どうなってるかな？と、想像したくなる。とても味のある好きな絵です。（がんばって美術館へさん、73歳）
- 印象派を踏襲しているようでいて筆あとは四角く、キュビズムっぽい印象も受けました。色合いがかわいらしくて どこか白昼夢のような雰囲気をはらんだ素敵な作品だと思います！こんな場所に行ってみたいです…。（めーさん、18歳）
- 光に当った緑色のブロックがたくさんある。きらきらしてさわやかで朝起きて散歩する時にこんな景色に出会えたらすがすがしい気持ちで一日を過ごせるかもと思わせてくれる「一日のはじまりの絵」。（前売り券だいたい買うマンさん、30代）
- 木漏れ日の揺らめきが見ているうちに変化していきそうなほど動きがある絵だと思います。木々の深い色合いは異国を連想させ、様々な場所に思いを馳せました。（Juliette さん、22歳）
- サイコロステーキを大しぜんの中であいじょういっぱい受けながら食べる。（平性さん、30歳）
- まず緑に、次に明るい陽ざしに、ほっとした安らぎを感じた。目にも心にもやさしい画で、好きです（トシタンさん、72歳）
- 絵のことは詳しくありませんが、色彩的にやすらぎを感じる絵です。緑が主役なので、おだやかな気持ちになります（H.Oさん、63歳）
- 幼い頃の夏の風景を思い出し、泣きそうになりました。あの頃の風とにおいを感じさせるような…（？さん、？歳）
- ちょっと雰囲気が暗く感じた。もっと明るい色で描いてくれると気分も明るくなりそう。人が一人で歩いていてさみしそう。（ファーミーさん、20代）
- 気もちがザワザワして『ジッ』と観ていられない絵だと思いました。感触（木々などの）が伝わってくる絵でした。（？さん、？歳）
- やわらかくて温かいけれどモザイク状にぬっているようにも見えてのどかなRPGゲームの世界観のような人工物感も覚える。時間がゆっくり流れていて平和な場面だと思うと裏腹にふとした瞬間にガラガラと崩れ去ってしまいそうな危うさもあるな、と思う。赤い服の人は何だろう。よく見ると歩いているようには見えなくて立ち止まったままこちらをじっと見つめているような少しの怖さもある絵。（ひじきさん、19歳）

鬼頭甕二郎は、1897年名古屋市中区御幸本町に生まれ、名古屋市立名古屋商業学校を卒業後に上京して絵画を学び、院展や二科展に入選しました。1923年から1928年はフランスに滞在し、毎年サロン・ドートンヌで作品を発表しています。滞仏中に描かれた本作では、印象派が好んで題材とした戸外の光や牧歌的な風景を、セザンヌを思わせるような構築的な筆触で捉えています。実際に作品を目の前にしてじっくり観察してみると、描かれていないストーリーを想像してみたくなったり、筆触から木漏れ日の揺らぎを感じ取ったり…観る人によって、また観る人のその時の気分によっても、様々に違った印象が立ち現れてきそうです。（KK）

協力会通信

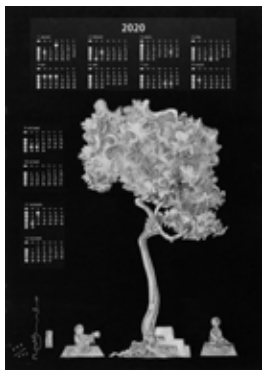
会員特典オリジナルカレンダー

当館の活動を様々なかたちでご支援いただいている「名古屋市美術館協力会」。会員の方々には、美術に親しみ教養を深める様々な機会が用意されています。例えば常設展の無料鑑賞、特別展招待券の贈呈、会員貸切の特別展鑑賞会の実施などの特典があります。本来ですと、ここで会員限定の春の美術鑑賞バスツアーをレポートする予定でしたが、訪問予定先の休館や移動自粛のためツアーは中止に。当館の休止も続いており、そのほかの特典の催事も当面実施が難しいことから、協力会は十分に活動できない期間の分だけ、現会員の登録期間を延長する方針を固めました。

さて、当館協力会のユニークな特典のひとつに、「オリジナルカレンダー」の贈呈があります。本紙で話題にするのは久しぶりなので、基本的な内容からご紹介します。2006年から始まったこの企画は、現在活躍中の美術家に、協力会員しか入手できない数量限定のカレンダーを制作していただくものです。制作を依頼する美術家は、主に地元の有力作家や、過去の特別展などで当館と関わりのあった作家です。近年ではグループ展「ポジション2012」に参加した名古屋市在住の山田純嗣氏や、特別展「モネ それからの100年」（2018年）に出品した松本陽子氏に、原画を描き下ろしていただきました。完成品には一枚ごとに作家の直筆サインと限定番号が記されています。年末の時点で登録中の会員には翌年のカレンダーが全員に配布され、その後入会した新規会員には部数の残りがある限り進呈されます。

2020年のカレンダーは、名古屋芸術大学教授の吉本作次氏による《樹下奏飲図》です。近年美術界では80年代以降の動静に脚光があたりはじめており、国立国際美術館で開催された「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」（2018－19年）に当館寄託の《中断された眠り Ⅰ》が展示されるなど、あらためて吉本氏の画業が注目されつつあります。《樹下奏飲図》は、昨年の「第71回正倉院展」に出陳された《金銀平文琴》（735年）の文様に着想を得て制作されたもの。特典カレンダー史上初の黒い背景と黄色い人物は、《金銀平文琴》が漆塗りで金の薄板による装飾が施されていたことに由来します。吉本氏の絵画らしい、軽妙ながら荘厳さも感じられる作品に仕上がりました。

会員の皆様には、来年以降のカレンダーもひそかに楽しみにしていただければと思います。（nori）



2020年協力会オリジナルカレンダー
原画：吉本作次《樹下奏飲図》2019年

イベントガイド

■工事休館のお知らせ

名古屋市美術館は、2020年11月から2021年３月の期間で予定していた改修工事を前倒して実施中のため、現在休館しております。

今後の特別展の開催予定については、下記のとおり変更となります。

○特別展
「アートで旅するなつやすみ
　　サマー・エスケープ」
会期（当初予定）：
2020年７月11日㈯～８月30日㈰
→改修工事終了まで開催延期

○特別展
「「写真の都」物語
　　―名古屋写真運動史：1911－1972―」
会期（当初予定）：
2020年９月12日㈯～11月１日㈰
→改修工事終了まで開催延期

なお、常設展及び各種講演・イベントなども、当初予定時期と今回の改修工事の期間が重複するものについては、延期または中止となります。

工事終了時期及び展示等再開の時期は今のところ未定ですが、確定次第、適宜当館ウェブサイトでお知らせしますので、よろしくお願いします。

休館日＝月曜日（祝休日の場合は開館し、翌平日休館）
※改修工事のため、当面の間休館します。（TT）

展評

2020年５月19日(火)～６月21日(日)
愛知県陶磁美術館

異才　辻晉堂の陶彫
「陶芸であらざる」の造形から

辻晉堂（1910－1981）は、鳥取県に生まれ、1949年に京都市立美術専門学校（現在の京都市立芸術大学）の教授に就任した。やきものと彫刻の領域を横断した「陶彫」による抽象作品で、国際的に活躍した作家である。今回の展覧会では、第29回ヴェネツィア・ビエンナーレ出品作をはじめ、彼が京都に制作拠点を移してから手がけた陶彫作品や、版画・素描作品などが展示されていた。

まず特筆すべきは、辻の優れた観察眼である。彼は身の回りの人物や動物の形態を、デフォルメしつつ抽象的なフォルムに還元したが、この過程では「対象物をよく見る」という行為が必要になる。たとえば《猫の頭》(1956年）は、猫の頭蓋骨の骨格を下から見上げた形で制作された。そしてこのように本質を捉えようと試みる眼は、社会にたいするユーモラスかつ批評的な視点にもつながっているように思われる。窯道具の破片を用いたアッサンブラージュ風の《詰込教育を受けた子供》（1960年）や、美術館の前に長蛇の列をつくり図録を持ち帰る人々が描かれた版画《長い長い行列》（1967年）は、彼の世相への関心が垣間見える、クスッと笑わされるような作品だった。

また面白いのは、素材や技法との対話から生まれた抽象造形である。《小判型と七つの小窓》（1962年）では、三層の壁状の立体が平行に組み合わさり、そこに複数の穴があけられている。瀧口修造やイサム・ノグチが「家」のイメージをもったとされるこの扁平な形態は、窯での焼成という技術的制約によるものだったが、辻はここで同時にやきものの空洞性を上手く利用した。穴を正面から見た時の暗さが、平面的な壁状立体のなかにも深い奥行きを暗示するのだ。二次元的な平面性と三次元的な奥行きをいかに両立するかという問題は、戦後の抽象絵画においても度々あらわれるが、上述の形態はこれらに対する辻の一つの解答であったともいえるだろう。

陶芸と彫刻のジャンル横断的な制作に取り組んだ作家を紹介する本展は、新たな視点で戦後の造形を再考する契機を与えてくれた。名古屋市美術館のコレクションにおいても、陶芸に限らず、建築やテキスタイルあるいは音楽など、同時代の他ジャンルの芸術との呼応を検証する試みには、今後取り組んでいく価値があるだろう。（KK）

辻晉堂《小判型と七つの小窓》1962年　愛知県陶磁美術館蔵
（撮影：清忠之）

展評

2020年６月２日(火)～７月５日(日)
岐阜県美術館、岐阜県図書館

清流の国ぎふ芸術祭
Art Award in THE CUBE 2020

コロナ禍により全国各地の美術館博物館の活動が停止される、かつてない世情を経て、ようやく徐々にではありますが、各地で展覧会が再開されつつあります。今日では、「ステイ・ホーム」であっても有名な絵画作品ならば高精度の画像を見ることができますし、美術でなくても動画配信サービスで“暇をつぶす”ことはできます。ただ、立体作品や「インスタレーション」と呼ばれる空間構成については、やはり実際に作品と対峙し、距離やスケールを感じない限り、その面白みは享受できません。

「自粛明け」に見た「Art Award in THE CUBE 2020」は、見る“楽しみ”を思い出させてくれる展覧会でした。当初、４月18日に開幕する予定でしたが、コロナ禍により一ケ月以上もその開催が延期されていました。

2017年に続き、二回目となった今回は、「記憶のゆくえ」というテーマの下に、710点もの応募があったと聞きます。前回同様、提示された展示空間は、４.８×４.８×３.６ｍのキューブ（立方体）で、作家と作品には、観る者をその内部へと招き入れるべく、空間に対する構成と表現力が問われます。屋外に設置された４点を含む、18点の作品は、さすがに入選を勝ち得ただけあって、魅力にあふれた作品ばかりでした。

紙に印刷された一千体仏によって空間内部を曼荼羅として表現した橋本哲史、発光ダイオードと鏡によって暗闇の無限空間を現出した宙宙、カメラ・オブスキュラの原理により、太陽の姿と屋外の光景を内部に映し出すW.N.project等、いずれもが空間を強く意識した作品を発表していました。

なかでも、北川純（1965年愛知県生まれ）の《質量保存の法則》は出色でした。キューブに内接するかのような巨大なビニール製のビーカーの内部には、同じサイズのビーカーが設置され、それぞれの内部には、布と糸による雑木林のシルエットと伸縮する高層ビルのつづれ織りが仕組まれ、空気の出し入れによってしぼみ、充満することによって、自然と都市が交互に現れます。スノー・ドームを覗きこむようなメルヘンチックな感覚を覚え、いつまでも見ていたい気にさせる作品でした。こうした感覚こそが展覧会を見ることの醍醐味であると言えましょう。（J.T.）

北川純　《質量保存の法則》 2020年
図版提供：清流の国ぎふ芸術祭
Art Award in THE CUBE実行委員会

BOOK

『Nam June Paik』

（By Sook-kyung Lee and Rudolf Frieling, Tate Publishing, 2019）

同書は、「ビデオアートの父」とも呼ばれるナムジュン・パイク（白南準、1932－2006）の世界巡回展のカタログでもあります。展覧会は、ロンドンのテート・モダンが中心となり、作家の没後、ヨーロッパで開催される初めての大規模な回顧展です。ロンドンの後、アムステルダム市立美術館で今年の８月まで開催され、その後、シカゴの現代美術館、サンフランシスコ近代美術館に巡回、最後にナショナル・ギャラリー・シンガポールで終了します。

実は、当館が所蔵するナムジュン・パイク《ロボット家族（お父さん）（お母さん）》について、同展覧会への出品依頼がありました。ただ、作品の状態が、国際巡回展に伴う長い移動距離に耐えうるかが懸念され、残念ながら貸出については断念しました。同作品に関しては、2014年にニューヨークで開催された展覧会に出品すべく“地デジ化”とブラウン管テレビから液晶モニターへの変換を行いました（修復の経緯とニューヨークでの展示については、2014年８月の美術館のブログで紹介しています）。

その時に脳裏をよぎったのは、パイクの《ロボット家族》のそれぞれの個体が修復・改良され、現在でも作家が意図したように正しく鑑賞できるのかという疑問と、抑々《ロボット家族》全員の所在すら確認できないのではないかという不安でした。実際、ニューヨークでは当館所蔵の（お父さん）（お母さん）とシカゴの美術館が所蔵する（赤ちゃん）が展示されただけでした。言い換えれば、それだからこそ、当館に貸出のオファーが来たのでしょうが。

同カタログの頁を繰って行くと、初期のグラフィック・ワークからパフォーマンスの記録、そして映像へと移行して行くその構成は一見すると無難ですが、作家の表現を検証し、伝えようとする強い意思を感じさせます。そして、モニターを組み立てた「ビデオ・スカルプチャー」と呼ばれる一群の作品のなかに《ロボット家族（おじさん）（おばさん）》（個人蔵）を見出した時は、正直驚きました。修復や改良を施さない限り、進化する今日のメディア環境のなかでは消えていくしかないパイクの芸術を、未来へと伝えて行こうとする気概さえ感じました。

ロンドンでの展示が始まり、全世界で新型ウィルスの感染が拡大する少し前、最終会場であるシンガポールへの出品の打診が再び届きました。（J.T.）

展評

2020年５月23日(土)～６月21日(日)
ギャラリー数寄

風景・都市・視覚－70年代
庄司達展

庄司達は布を使ったインスタレーションで知られるが、今回の個展では、ドローイングを拡大コピーしたものや、絵葉書のコピーに手を加えたものなどを中心に、1970年代に集中的に取り組んだ紙による作品群が並ぶ。その多くが、発表当時の作品を修復し、再制作したものだ。庄司によると、これらの作品はすべて「検証活動」であり、実験的な意味合いが強いという。たとえば、唐招提寺を写した絵葉書を拡大コピーし、手前に写る萩の花を赤い線でなぞった作品。見る者の視線は奥の金堂から手前の萩へと誘導され、植物が描く複雑な造形に気づく。見る者の目の動きを想像して、人が無意識に眺めていた造形をあぶりだし、風景を変容させる手法は、のちの布の作品に通じている。

ギャラリーの２階には「風景・物体シリーズ」と題したインスタレーションを展示。都市生活で目にする様々なモチーフ（ポスト、ベンチ、噴水、テレビ塔、電話機等々）を、すべて30㎝程度に高さをそろえて紙粘土で作り、床面に並べる。1972年に発表したものに、今年新たなモチーフを作り足して再展示した。約50年の時を経て様変わりした街の様子が想像されて面白い。たとえば路面電車や旧式の電話機、蔵などは、今では見られなくなったものだ。一方で、地下鉄の出入り口や、大きな球体を抱いた名古屋市科学館など、現在ではなじみのある建造物も並ぶ。いずれも、街の歴史や記憶と結びついているが、風景に注意深くならなければ見過ごしてしまうものばかりだ。戦後、焼け野原だった名古屋に新たな街が形成されるさまを見つめてきた庄司は、名古屋の都市風景がどのように変化してきたかという問題意識を持ち、風景に対する検証を続けている。この検証活動が、次の作品にどのように結実していくのか、楽しみに待ちたい。（haru）

庄司達《風景・物体 3》1972－2020年　ⓒito tetsuo

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

仮設の映画館－タゴール・ソングス

この春、名古屋で上映が予定されていた映画の一本に「タゴール・ソングス」（佐々木美佳監督）がありました。この映画は、ラビンドラナート・タゴールがつくった歌（タゴール・ソングス）が、なぜインド、バングラデシュのベンガルの人々に100年近く過ぎた今でも歌われ、愛され続けているのかを追ったドキュメンタリー映画です。

しかし、上映館は感染症拡大防止により休館となり、映画は公開延期となりました。こうした窮地に陥った全国の映画館や制作者によって、インターネット上に「仮設の映画館」がつくられました。観客は見たい映画と劇場を選び、料金を払って鑑賞します。そしてその料金は、通常の劇場と同じく劇場と配給会社、制作会社に分配される仕組みというものです。「タゴール・ソングス」はこの「仮設の映画館」にて公開配信されました。

ラビンドラナート・タゴールは、1861年にインドのコルカタに生まれ、1941年に亡くなっています。インドでは詩聖として尊敬を集め、1913年にはアジア人で初めてノーベル文学賞を受賞し、その才能は音楽、絵画、戯曲、哲学と多岐に亘り、2000曲以上の歌をつくりました。そのなかにはインドとバングラデシュの国歌も含まれています。また、岡倉天心と親交があり、日本に複数回来日しています。

映画には、タゴール・ソングスとともに生きる人々が登場します。そして、歌はベンガル語の言葉が持つ音と旋律が美しく調和し、心をとらえます。画面を前に、耳ではベンガル語の歌を聞き、そして目では字幕で意味を知り、深い感動で心が満たされていく気持ちになりました。ベンガルの人々は幼いころからタゴール・ソングスを聞き、歌っています。それは心を潤す水であり、心を解放する力であり、そして祈りであり、より所になっていることが伝わってきました。映画の中で、自然界のものはすべて規則正しく動き、それぞれのリズムに従っており、タゴールの思想はこうした自然の摂理に基づいているということが語られます。何度か聞いているうちに、歌が自然に私の心の奥底に流れていることに気づきました。

このたびはネット上で「１日レンタル」したので、繰り返し鑑賞することが可能となり、ゆっくり歌を味わうことができました。一方、映画館のスクリーンでは、パソコンの画面では見えてこなかったベンガルの風景や人々の表情などが見えてくるでしょう。ぜひ映画館でも見てみたいと思います。（I.）

※仮設の映画館 www.temporary-cinema.jp
（期間限定）

【編集後記】

今年度４月より学芸員として勤務を始めました。今後どうぞよろしくお願い申し上げます。

美術館では現在、先の見通しが立たないながらも再開館へむけて諸々の調整と準備が進んでいます。そんななか私は、今年32周年を迎えた当館の歩みを学ぶため、このアートペーパーのバックナンバーや過去の年報などをめくる日々を過ごしていました。あらためて当館のコレクションの独自性には目を見張るものがあり、こんな展覧会をしてみたい、あんなプログラムはできないだろうか…などと想像が膨らみます。

こんな時期だからこそ、所蔵作品の価値と地域の美術館としての存在意義に、いま一度立ち返るべきかもしれません。これまでの方々が積み重ねてきてくださったものを引き継ぎながら、新しい価値を皆様と共有し、次の世代へ受け渡していく一端を担えたらと考えています。（KK）

アートペーパー第114号 発行日：2020年８月１日
発行 名古屋市美術館
［芸術と科学の杜・白川公園内］
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅・矢場町駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休 館 日：毎週月曜日（祝休日の場合は翌平日）
年末年始
開館時間：午前９時30分～午後５時
祝日を除く金曜日は午後８時まで
※入場は閉館の30分前まで
Nagoya City Art Museum

執筆者／深谷克典（F）、井口智子（I.）、保崎裕徳（nori）、竹内智哉（TT）、竹葉丈（J.T.）、角田美奈子（み。）、中村暁子（AN）、清家三智（3）、森本陽香（haru）、勝田琴絵（KK）